

子どものグリーフサポートグループの意義を考える： ルーテル学院大学および日本ルーテル神学校における 17年間の子どもの集まりの取り組みを通して

小嶋 リベカ* 石井 千賀子**

I. はじめに

様々な喪失が人生において起こるが、家族との別れは、それに伴う揺らぎの中で多くの変化と大きなストレスを生じさせる体験となり得る。そのことは、子どもにとっても同様である。Holmes & Rahe(1967)の未成年版の社会的再適応評価尺度による研究では、様々な出来事の中でも「親との死別」が最もストレスの「総量」が大きいことを示している。また、Worden(2001)は、死別体験が子どもの人間関係や精神保健に影響を及ぼすことを報告している。こうした喪失体験をもつ子どものサポートとして、喪失体験をした同年代の仲間が集うピアサポートの場であるグリーフサポートグループが、気持ちの表出や現実への適応力や理解力を高める上で有効であることが明らかとなっている(Pfeffer 2002)。

我が国でも家族を亡くした悼みを抱える子どものために、心理社会的なサポートを重視したグリーフサポートグループのニーズが1990年代に

語られ、そのためにトレーニング・マニュアルが翻訳された(Dougy Center 1993/1997)。そのような動きに応じて「だいじな人をなくした子どもの集まり(以下、「子どもの集まり」)」が1998年に開催され、現在も継続されている。この活動はルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所主催により1998年2月に第1回が開催され、現在は日本ルーテル神学校附属デールパストラルセンターの主催で継続されている。

本稿では開催準備の研修期間も含めて20年近くに及ぶこの「子どもの集まり」の活動に焦点を当て、その歴史、参加者統計、具体的な実践方法と状況、ファシリテーターの役割の側面から、その取り組みについて述べる。さらに、このグループに参加し、10数年を経てグリーフ・プロセスを振り返った親子からの声も合わせて載せ、その活動の意義を考察する。なお、喪失後の様々な感情や反応を含めたグリーフの表現を本稿では「悼み」と表記する。

* Kojima, Rebekah
日本ルーテル神学校附属デールパストラルセンター
グリーフサポート研究会 子どもの集まり担当

** Ishii, Chikako
ルーテル学院大学 非常勤講師, TELLカウンセリング
家族療法家, 石井家族療法研究室 スーパーヴァイザー

II. グリーフサポートグループの意義

子どもがだいじな人と死別した際、認知的理解や悼みの表現は、発達段階において異なる【表1】。

加えて、グリーフ・プロセスは段階を踏みながら一直線に進んでいくものではなく、二重過程モデル【図1】に示されているように、日々の営みをつづける中、喪失に関連する悼み（喪失志向）と

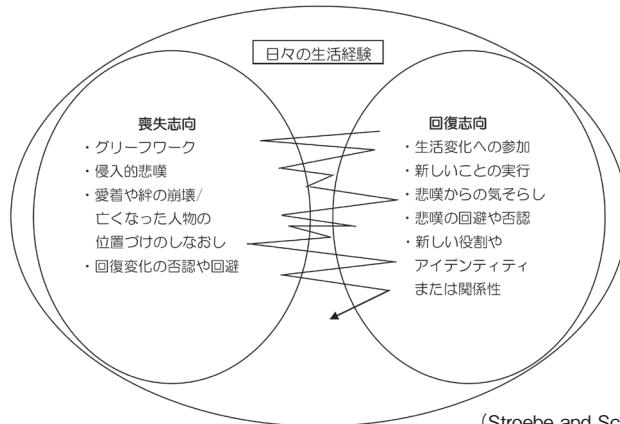
【表1】 発達段階における「死」の理解と表現

年齢	死の理解	表現の仕方
0-2 歳	死別をそのまま理解はできにくい、親の不安定な気持ちを身体で感じ取ることがある	思いを言葉にはできず、不安な思いを「眠れない」「食べられない」「泣き止まない」といったかたちで表すことがある
3-6 歳	死別について言葉にすることはあっても、事実としてきちんと理解はできにくい。「死んだ」ということが「一時的にいない」と理解することもある。また、本やテレビで聞き知ったファンタジーと「死」をつなげ、現実と空想の世界の区別がつけられないことがある。例えば、「ママはこれからずっと眠ったままなのよ」と大人に語りかけられ、「ママはいつ起きるの」と聞く。また、「天国に住んでいる」と聞き、「(自分も)天国に行きたい」という必死な思いを抱くことがある	幼児期は物事に集中して取り組む時間が短いため、何事もない様子で過ごしていても、急に何か(悪夢、類似した出来事との遭遇)をきっかけとして怖がったり、はしゃぎ始めたりすることもある。また、「遊び」のなかで気持ちや願望を表現していくことがある
7-10 歳	「死」について「生き返らない」という理解ができ始めるが、『もしかしたら、生き返るんじゃないか』、『もしかしたら、自分も死ぬんじゃないか』と過剰な不安を抱くことがある	不安を抱くことで、頭痛や腹痛をおこすことがある。また、『自分が悪い子だったから、死んだんじゃないか』と事実とは無縁な罪悪感を抱くこともある
11 歳以降	「死」が知識として理解できるが、感情が揺れ動き、不安定になりやすい	心と身体の成長がかみ合いにくい思春期の時期であり、『どうでもなれ』という思いが起きやすい。感情の動きに波があり、非行的な行動をすることもある

※上記の「死の理解」や「表現の仕方」は、個人差がある。

ルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所 グリーフ研究会, 2005 より改変

注) 表1はルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所グリーフ研究会(2005)をオリジナルとするものではあるが、「子どもの集まり」参加者の声(『 』内)を反映し、一部改変した。



(Stroebe and Schut 2001/2007:71より転載)

【図1】 死別へのコーピングの二重過程モデル

喪失後の新たな環境への適応（回復志向）の間で揺れ動きながら、折り合いをつけていくものである（Stroebe and Schut 2007）。その間に見せる子どもの悼みの表現は、目に映る悼みだけではなく、隠された悼みをもつことがある。例えば、死別体験後に「ものわかりが良い、手のかからないいい子（心配無用児タイプ）」と映る子どもの表現も

あれば、「度々、身体の不調を訴える手のかかる子（不健康児タイプ）」、「周囲の大人に反抗的な子（問題児タイプ）」などと、一見、喪失体験とは何の関係もないように見える姿もあり、子どもの日々の営みにおける SOS 反応が、周囲に伝わりにくいことがある【表2】。

そのような悼みを抱えた子どもは、周囲を気

【表2】喪失体験後の子どもにおける3タイプのSOS反応

SOS 反応	身体への反応	遊ぶときに見られる様子
不健康児タイプのSOS反応	頭痛、腹痛、身体の痛みなどの訴え、食欲不振、不眠、夜尿などの症状がみられる場合がある。不安や心配事が、身体の痛みや体調の変化として表れている状態とも考えられる。	不安を抱え、積極的に行動を起こすことや遊ぶ際に心身に力が入りにくいように見えることがある。よって、手先のみを使う手芸やゲームといった遊びを行ったり、一つの遊びに集中せず、いろいろな遊びを試すような姿が見られることがある。
心配無用児タイプのSOS反応	何事もなかったかのように元気でツウ、気が利く良い子に見られる場合がある。一見、「この子は悲しみを乗り越えた」と、受けとられがちである。しかし、それはポツカリ空いたままのアナを、必死に塞ごうと踏ん張って家族を助けている状態とも考えられる。	周囲の思いや動きに気を張り、気遣いながら遊ぶことが見られることがある。自分がしたい遊びを行うというよりも、周囲に勧められた遊びや誘われた遊びを行う姿も見られることがある。
問題児タイプのSOS反応	急に感情を爆発させたり、口答えをして周囲を困らせたりする場合がある。これは「もう、がんばれない」「誰かに気にしてほしい」「自分では感情がコントロールできないくらい苦しい」という「声」の可能性とも考えられる。	身体の内から噴き出すようなエネルギーをパンチングバッグやスポーツを通して発散するような姿が見られることがある。

ルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所 グリーフ研究会，2005より改変

注) 表2はルーテル学院大学附属人間成長とカウンセリング研究所グリーフ研究会(2005)が作成した資料に、17年間に亘る「子どもの集まり」で見られた遊びの表現を加え、改変した。なお、2005年版の分類はダギーセンターマニュアル(Dougy Center 1993/1997)を参考にした。

遣ったり、家庭や学校で居場所をみつけにくかったりすることがある。周囲がよかれと思って対応する言動に傷つくこともある。グリーフサポートグループは、同世代の喪失体験者と出会う空間である。仲間と一緒に死別について向き合う場でもあり、かつ何らかの事実誤認が生じている場合には、それを修正する場にもなりうる。その有効性については、「家族に気遣うことなく自分の感情を表出できる」、「グループの中では、同世代の仲間だけではなく、グループをまとめる担当

者(ファシリテーター)からも支えを得ることができる」、「自分だけがこのような経験をしたのではないことを知ることが確認できる」(Worden 2001 筆者試訳)などが挙げられている。さらに、サポートグループに参加したグループとコントロール群を比較した米国での研究によると、サポートグループに参加した自死遺族の子どもは、不安や抑うつ症状の改善などの変化が大きいことが実証されている(Pfeffer 2002)。

II-1 ダギーセンターの取り組み

このような子どものグリーフサポートグループの意義を理解し、実践を先駆的に行ってきた施設は、米国オレゴン州ポートランド市近郊にあるダギーセンター(The Dougy Center)である。ダギーセンターは、1982年より子どもを対象に参加者の年齢別、死因別等に分けたグループ活動を実施し、そのためのファシリテーター研修も行っている。この働きは実践の礎として、その後全米のみならず国際的にも“ダギーセンターモデル”として広がっている。ダギーセンターが子どものサポート活動において大切に考えている3つのことは、下記の通りである(Dougy Center 1993/1997)。

- 1 だいじな人が死んだことを理解する
- 2 死別によって生じる様々な気持ちを感じる
- 3 人生の折々にだいじな人を思い続ける

子ども自身がきちんと悼むことをサポートする“ダギーセンターモデル”を、「子どもの集まり」の実践モデルとしている。

II-2 ルーテル学院大学及び日本ルーテル神学校でのグリーフサポート活動史

グリーフサポートグループは、ルーテル学院大学付属人間成長とカウンセリング研究所(Personal Growth and Counseling Center 以下、PGC)の働きの一つとして誕生した。1991年度PGC運営委員会にて、将来計画として「悲嘆にくれる人々へのサポートグループ」を行うことについての討議がされた(PGC 2013)。一方、同年9月、ルーテル学院大学では、米国オレゴン州ポートランド市にあるコンコーディア大学との姉妹校提携を活かし、社会福祉海外研修ツアーを実施し始めた。その際に大学と同市に位置するダギーセンターを見学するようになったことがきっかけとなり、1995年10月、本大学とPGCが初めてダギーセンターの当時トレーニングディレクターであったシンシア・ホワイト氏を日本に招き、グリーフ

フサポート専門研修会を開催した。そして、1996年よりグリーフサポートに関する勉強会がPGC内で行われ、1997年10月より大人向けグリーフサポートグループ「身近な人を亡くした思いを語り合う会」がPGC主催で延べ180回開催された。一方、子どもとその保護者向けのサポートグループ「だいじな人をなくした子どもの集まり」は1998年2月より103回開催されてきた。なお、2012年7月、PGCが閉所したことに伴い、それ以降、グリーフサポート活動の主催は、日本ルーテル神学校に引き継がれた。

II-3 「子どもの集まり」参加者の概要及び統計

2015年7月の時点で、103回開催されてきた「子どもの集まり」は、家族と死別した中学生までの子どもとその保護者を対象とし、隔月1回2時間半のプログラムを行ってきた【図2】。その参加

開催頻度：隔月1回(2時間半のプログラム)
※事前申込制
対象者：家族と死別した子ども及び保護者
*死因は問わない
定員：10名程度
集まりの種類：
・子どもの集まり(6歳～15歳)
・保護者の集まり(参加する子どもの保護者)
・小さな子どもの集まり(0歳～6歳)

【図2】「子どもの集まり」の概要

者数は、延べ554名である。今回、「子どもの集まり」と同時開催の保護者の参加人数は加えず、子どもの参加者のみを集計している。詳細は【表3】のようになる。延べ参加者数のうち56%(312人)が男子であり、44%(242人)が女子であった。そのうち、未就学児は14%、小学1～3年生は34%、小学4～6年生は42%をしめ、中学生の割合は10%であった。小学生の割合が総数の約75%を占めている。また、表には含まれていないが、延べ参加者数の63%が父親との死別を体験しており、母親との死別は29%であった。保護者の集まりの参加者数は配偶者を亡くした女性が

【表3】参加者(子ども)の属性

性別	学年	死因
男 312人(56%)	未就学児 77人(14%)	病死 420人(76%) 自死 72人(13%) 事故死 62人(11%)
	小学1～3年生 190人(34%)	
女 242人(44%)	小学4～6年生 232人(42%)	
	中学生 55人(10%)	
※延べ参加者数：554人 ()内は割合		

圧倒的に多い状況から、父親と死別した子どもが多く集まっていることが考えられる。親以外との死別では他に、弟、祖母、兄、姉、祖父、叔父の順にその割合が減少していった。なお、死因については、病死が最も多く(76%)その他、13%が自死、11%が事故死であった。

Ⅲ. サポート活動を支える2つの柱

「子どもの集まり」は、大きく二つの柱によって支えられ、プログラムの継続的実施がなされている。一つは自己の経験した喪失を見つめることを重視している「ファシリテーター養成研修」、もう一つは構造的な枠組みを大切に「グリーフサポートグループの実践活動」である。

Ⅲ-1 ファシリテーター養成研修～自己の喪失体験を知る意義～

「子どもの集まり」において援助的に寄り添う大人のことを、ファシリテーターと呼んでいる。ファシリテーター養成研修において、子どものサポートに要する基本的スキルを習得することは必要ではあるが、それ以前に「自分自身の喪失体験を知ること」が重要であると考えている。なぜなら、ファシリテーター自身の悼みが、無意識に自身の行動に影響を及ぼすことがあり、その悼みは非常に大きなエネルギーを保ち、時には制御不可能な場合もあるためである(Boss 2015)。

子どもの悼みの感じ方は個別的なものであるからこそ、多様な表現が「子どもの集まり」の場で見られ、その場をファシリテーターが共有する。その際、子どもの表現方法がたとえどんなにユニークであるとしても、「子どもの集まり」の場ではそれを正誤判断や解釈の対象とはしない

(White 2004)。そして、傍にいたファシリテーターは、子どもが安全である限り、子どもが選ぶ方法で自由に表現していくことを保障し、どのような場面であっても相手を変えようとせずに寄り添う姿勢が求められている。

しかし、このことは容易なことではなく、ファシリテーターは、自身の悼み方と異なる子どもの表現方法を目にする場面においては、特に、衝動的に相手の悼み方をコントロールし、変化させなくなる可能性を抱えている。よって、ファシリテーターの役割を担うための研修において、自分の悼みに関する波動が何によって強まるのかを客観視し、気づいていく体験は欠かせないのである。

Ⅲ-2 実践活動 ～枠組みのある構造～

本活動のプログラムは、ダギーセンターで行われている基本的な流れにそって行われている【図3】。ただ1点、オリジナルで行うようになったこ

- | | |
|---|---|
| A | はじめの輪 (10分) |
| B | 遊び (70分) |
| C | おやつ/なんでもボックス(30分)
*なんでもボックス=喪失に関する話をする時間 |
| D | 遊び (30分) |
| E | おわりの輪 (10分) |

【図3】「子どもの集まり」の流れ

とは、「なんでもボックス」の時間である。これは、子どもたちがだいじな人のことや自分の感情について、表現する時間である。おやつ時間を設けた際に誕生したプログラムであったため、集まりの流れの中間に、参加者全員が揃って行われるようになった。当初、「一番、ムカッとしたこと」「死んじゃった人に言いたいこと」などの質問紙を、一つの箱におみくじのように棒状に入れ、一

人ずつ引くスタイルで行われた。おみくじを媒介にして、個人が気持ちを表現する時間であるばかりでなく、自然に参加者同士の応答が生じる時間となっていた。現在は様々なバリエーションがあり、参加者の年齢や性別等のグループ構成に応じた工夫を加え、行われている。

長年、「子どもの集まり」を繰り返す中での実践活動の要は、子ども自身が限られた時間と空間を用いて、主体的に行いたい事柄と、表現方法【図4】【図5】を選択できることである。本活動では、そのために3つのことを重要と考えて開催している。



【図4】 室内で指絵具やコラージュ、ゲームなどを使用しながら過ごす子どもとファシリテーターの姿



【図5】 屋外で仲間と共に身体を思いきり動かし、エネルギーを発散する遊びを行う子どもたちの姿

1. 「始まり」と「終わり」が明確なプログラムの提供

子どもは喪失体験によって関係性や社会的変化を重ね、それらの揺らぐ体験を通じて不安を感じていることがある。そういった日常の場から、普段は積極的に触れることのないグリーフを扱う非日常的な空間（「子どもの集まり」の場）への移行が生じる際、まず子ども自身が、その時間と空間に対して過剰に不安を感じないことが大切である。そのための工夫の一つは、その時間や空間に、日常とは区別できる「枠」を設けることである。「枠」とは区切りのようなものであり、例えば、プログラム全体の「始まり」と「終わり」が明確であることや毎回同じプログラムの流れが繰り返されていることを指す。そのことは、参加者が次に起こることを予測でき得るばかりでなく、子ども自身の自己コントロール感を高め、その場に安心感を抱きやすくすると考える。なお、少しの変化においても敏感である子どもが少なくないため、【図3】の流れを構成するABCDEそれぞれにおいても、「始まり」と「終わり」が明確に伝わる言動やアクションをファシリテーターが子どもに示したり、通常と異なる活動内容が予定されている場合には、事前に参加者に予告したりすることを心がけている。

2. 8つのルール

「子どもの集まり」において大切にしていることは、8つのルールである【図6参照】。これらは、その日に集まる子どももファシリテーターも共に保守する。

1. STOPといわれたらSTOPする
2. 人や自分をいじめない
3. 話したくないことは話さなくてもいい
4. 血にさわらない
5. ひとりにならないで大人と一緒にいる
6. あぶないことをしない
7. 人の嫌がることをしない、いわない
8. ないしょはないしょ
(自分については自由だが、仲間のことは外部で話さない)

【図6】 「子どもの集まり」のルール

ルールが設定されていることにより、お互いの心身の安全が確保されるばかりでなく、そのルールの範囲で子どもが個々に表現の選択や自由を獲得し得ることにもつながっていると考える。仮に、ルールが守られない状況が起こった場合は、その場にいる子どもの動きを止め、注意をするのではなく、互いに短く事実とルールを確認し、遊びを再開する。そのことはファシリテーター主導で行う。

3. ファシリテーター同士で行う2回のミーティング

活動において大切にしていることの3つ目は、プログラム前後に1時間ずつファシリテーターのみで行うプレミーティングとポストミーティングである。これらのミーティングはファシリテーターの安心感が保障されるために行う。なぜなら、ファシリテーター自身も参加者と同様、日常生活の習慣と関係性を抱えたまま「子どもの集まり」に集う。そのため、グリーフサポートという日常と異なる空間に身を置くことを意識し、気持ちを切り替え、役割を確認する時間を設ける必要がある。また、これらのミーティングは、「子どもの集まり」の際、ファシリテーター同士が互いに気づかい合い、チームワークを保つための時間となり得る。チームワークが築けることにより、子どもと共に在る時にも、自らの感情や衝動にまかせた行動を抑えることを意識したり、また他のファシリテーターと協力や交代し合い、自らの体力に無理なく子どものグリーフ表現の強弱に合わせて過ごしたりすることが可能になる。ファシリテーター同士の連携は、参加者である子どもの安全にも通じると考える。

これら「『始まり』と『終わり』が明確なプログラムの提供」、 「8つのルール」、そして「ファシリテーター同士で行う2回のミーティング」の3つは、これまで100回以上の「子どもの集まり」の開催継続と普遍的なプログラムの提供を可能にしている主軸と考える。

IV. 参加者の声

10年以上前に「子どもの集まり」に参加した母子が、当時のことを振り返って寄せられた思いを、許可を得て紹介する。

IV-1 「子どもの集まり」に子どもを連れてきていた保護者の声

娘は9歳(小3)の秋に父親を病気で亡くしました。10歳から集まりに参加しました。

子どもの集まりに行っている時、娘はバス停までの帰り道に集まりでの出来事を興奮して嬉々として語り、バスが走り出すと「ルーテルの景色が逃げてっちゃう」と語る姿がありました。

集まりに参加することがOKだったということは、今だからわかります。わからないながら、(当時)継続して通っていてよかったと思います。今、振り返るとあの時のことはすべてキラキラしたことになっているんです。娘は、集まりで行ったコラージュを家でも行い、言語化しない形で表現する方法があることを知ったことも大切だったのだと、振り返ると思います。

娘は20歳を超えてから自分の経験を言葉にできるようになったように感じます。ずっとモヤモヤしたぼんやりとした世界にいたようです。

ルーテルの集まりに関わられた事はとても幸運な事でした。この出会いがなければ、今に至る親子が共に成長できなかったと思います。

IV-2 「子どもの集まり」に参加した子どもの声(女性Aさん:現在20代)

(私にとっての集まりの存在・現在の自分への影響)

私にとって集まりは一言で言うと「安心できる場所」でした。一人でいたいときはひとりで、でも誰かがあたたく見守っていてくれる視線は感じ取れる。友だちと、騒ぎたいときはとことん騒げる。また、学校と変わらない遊びだったとしても、子ども同士で同じ経験をしている心の奥底でつながってい

る感覚がありました。

ボール投げの部屋や夏は水遊び、大きな模造紙に指絵の具でお絵描き、家では絶対にできないプログラムがあり、「やりたい!」と言えば周りのスタッフが思いを叶えるため一生懸命にサポートして下さいました。また、集まりで過ごす際のルールの一つが好きでした。「話したくないことは、話さなくてもいい」が私を一番安心させました。そんなことを言われたのは、初めてだったのです。「聞かれたことには答えなければならない」と思っていたのです。

現在の私は、子どもに関わる仕事をしています。もしも、この集まりに参加していなければ私は大人を信用できないまま成長していったと思います。子どもに関わる仕事も選ばなかったはず。さらに言えば、人と関わるのが嫌いになっていたはず。この集まりの安心できる環境で、大人や友人とリラックスして過ごすことで、父が亡くなった以前の私を取り戻せたような気がしました。

(私が印象に残っていること・集まりだったから行えたこと)

一番印象に残っているプログラムは、おやつの時間。おやつの中にはみんな輪になって床に座り、くじ引きのような質問BOXがまわされ、一人一人引いていき答えます。その質問の中身は「亡くなった人について」や「自分の感情について」の質問がほとんどだったように思います。

普段、亡くなった人のことを話すのは、いけないことのような気がしていました。家族や親戚の前で話したら悲しんだり、泣いたりする人がいる。大切な人を亡くしたことのない同世代の友人には、気を使わせたり、びっくりさせたりなど困らせてしまう。何より、亡くなった人のことを話題に出すだけで、その場の空気がピンと張りつめるのを感じていました。でも、集まりでは話せる雰囲気だったり、本当に共感してもらっている人がいるという安心感がありました。また、自分では言語化できないことを友人が話していたりすると、「私のこの心の思いはそういうことだったのか!」と発見があったり。また、辛くて言えないと

きは無理して言わなくてもいい、というルールがあることによって安心して話すことができました。この体験は、この集まりにでしかできなかったことです。

（集まりに参加していた当時の自分自身について・当時、感じていた集まりの意義）

父がいなくなってから毎日が苦しかった記憶です。

「お母さんを支えてあげられるのはあなたしかいないのよ」「お母さんを困らせちゃだめよ」「きつとお父さんも、あなたがいい子でいるところを見てるわ」と次々と私にかけられる言葉。私は、「いい子でいなきゃ」「お母さんを助けなきゃ、支えなきゃ、守らなきゃ」と必死でした。母が悲しむことがあったり、いい子でいられなかった時などは、絶望にも近い思いでした。「早く大人にならなきゃ」とプレッシャーの中で過ごす日々から以前の私とは全く違ってしまっていました。

今だからこそ少しは、自分の置かれていた状況を理解、言語化できていますが、当時の私は何がなんだか、わからないままに時間が過ぎていきました。

そんな日々から解放されるのは集まりのある日だけでした。「こんな、学校があればいいのにな」と思ったのをおぼえています。

Aさんの言葉の中に、グリーフサポートグループの意義が見いだせる。

グリーフサポートグループの構造は、何をしてもいいという空間ではない。Aさんが「ルールがあることによって安心して話すことができました」と表現しているように、プログラムの細部は柔軟に変化させたとしても、軸がぶれることのない枠組みによって、グループの構造は保たれている。その中で、子どもが主体的に表現方法を選択できる場だと感じた時、「子どもの集まり」はAさんが言う「安心できる場所」に変化するのではないだろうか。さらに参加者同士は、それぞれの悼みが曖昧にされないという体験を重ねる中で、「自分では言語化できないことを友人が話していたりすると『私のこの心の思いはそういうことだったのか！』』ということを発見し、そこが

ピアサポートの場になり得るのだと考える。そういった場に寄り添うファシリテーターは「あたくかく見守り」、時に「(参加者の) 思いを叶えるために一生懸命サポートする」ことに努める役割を担うのである。

このようにグリーフサポートグループの意義を考える時、参加者に内在する悼む力と他者とつながる力を支えるプログラムの構造、そして子どもに関わるファシリテーターの柔軟に反応できる存在は欠かすことができない。

V. おわりに

「あと、100 回来たい！」というのは、1998 年の第 1 回目の「子どもの集まり」に参加した子どもの声である。喪失経験をし、その現実を揺らぎながらも抱えつづける子どもが、必要に応じてグリーフサポートグループに出向き、仲間と出会い、共に過ごせる場の提供がその後も 103 回、17 年間続けられてきた。本稿では、その「子どもの集まり」の長い経過を振り返り、その意義の一端を明らかにした。今後も、このグリーフサポートグループの活動をさらに継続し、日本におけるその意義を検証し、考察を重ねていきたい。

付記：「子どもの集まり」にこれまで関わったファシリテーターは総勢 31 名である。集まり毎の協働や意見交換を重ねた結果、現在までこの実践が継続できている。なお、本稿は 2015 年 8 月末に脱稿したものである。

引用・参考文献

- Boss, P.(2006)*Loss, Trauma, and Resilience: Therapeutic Work with Ambiguous Loss*. W. W. Norton & Company.(=2015 中島聡美・石井千賀子 監訳『あいまいな喪失とトラウマからの回復：家族とコミュニティのレジリエンス』誠信書房).
- Dougy Center (1993) *Instructor's Manual for Training Facilitator's of Groups for Grieving Children*. The Dougy Center. (=1997 ルーテル学院大学「死別体験をした子どもたち— ダギーセンター トレーニング・マニュアル」ルーテル学院大学).
- Holmes,T.H.,and Rahe,R.H. (1967)The Social

- Readjustment Rating Scale. Journal of Psychosomatic Research 11 (2): 213-218.
- ルーテル学院大学付属人間成長とカウンセリング研究所- PGC- (2013) 『30年のあゆみ-活動報告書-』ルーテル学院大学付属人間成長とカウンセリング研究所.
- ルーテル学院大学付属人間成長とカウンセリング研究所 グリーフ研究会 (2005) 『大事な人を亡くしたご家族へ』. ルーテル学院大学付属人間成長とカウンセリング研究所.
- Pfeffer, C.R., Jiang, H., and Kakuma, T. eds (2002) Group intervention for children bereaved by the suicide of a relative. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry 41(5): 505-513.
- Stroebe, M. S., and Schut, H. (2001). Meaning Making in the Dual Process Model. In R. Neimeyer ed. *Meaning reconstruction and the experience of loss*. American Psychological Association. (=2007 富田拓郎・菊池安希子監訳「死別体験へのコーピング(対処)の二重過程モデルから見た意味の構成」ニーマイアー(編)『喪失と悲嘆の心理療法-構成主義からみた意味の探求』金剛出版,68-82).
- Worden, J.W. (2001) *Children and Grief: When a parent dies*. Guilford Press.
- White, C. (2004) *Grief Education for Children and Ohana*. Kids Hurt Too Hawaii.
- ホワイト・シンシア他 (2001) 「日本における子どものグリーフワーク研究-サポートグループ「てとてとて」の実践を通して-」『テオロギア・ディアコニア 別冊(ルーテル学院大学社会福祉学科25周年記念論文集)』205-229.